

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 加藤重広

本論文は、文法論と語用論の両面から、日本語の連体修飾と連用修飾について論じ、あわせて品詞区分について検討したものである。

第1部においては、「修飾」という概念についての一般的考察を行い、第2部においては、連体修飾について、いわゆる形容動詞をどう考えるべきか、関係節がどういう場合に成立しうるかを中心に考察を加え、第3部においては、連用修飾について、それをどう分類すべきか、ゼロ助詞（つまり、名詞が助詞を伴わないであられる場合）の機能をどうとらえるべきか、などを中心に論じ、第4部においては、数量詞の問題、品詞の問題等を考察する。品詞論では、名詞、形容動詞（の語幹）、副詞、連体詞（の一部の語幹）の間に明確な境目が存在しないとして、一つの品詞と扱った上で下位区分することを主張している。

本論文は、歴大な先行文献を批判的に扱うとともに、作例を含む多くの日本語例文を自らの言語感覚を駆使して検討し、連体修飾と連用修飾に関する数多くの問題についての解明をはかっている。扱っている分野がきわめて広範囲に及ぶため、全体としての論旨のまとまりにやや欠ける感が否めないが、個々の問題の分析、特に語用論的観点からの説明はかなり説得力がある。また、日本語の連体修飾や連用修飾に関して検討すべき問題を全面的に提示したこと自体にも価値が認められる。

純粋に文法論的な観点からのとらえ方の弱さが指摘しうるが、それも全体としての価値を損なうとはいえず、今後の日本語研究に貢献するところが相当あるといえよう。

以上のような評価により、本論文が博士（文学）の学位を授与するに足るものであると結論する。